
好きになって

MMR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
好きになつて

【Nコード】
N2691I

【作者名】
MMR

【あらすじ】
「好きになつて」。夢の中で見た、誰かが自分に向けた言葉。いつたいたいそれは誰のものだったんだろう。

01・事の発端

あの時の僕は、こんなことを彼女の口から聞くことになるなんて想像できていただろうか。

「ねえ……………好きになつて」

夜の海という真っ黒なキャンバスに散りばめられる、建物の灯りを映し出した宝石のようなきらめきが、さらに反射して彼女の顔を揺らしている。

それはまるで、彼女の気持ちをあらわしているように。

……………いや、むしろ僕の今の心境なのかもしれない。彼女の言葉に、確実に心を揺り動かされているのだから。

「どうして……………僕なの？」

視線をまっすぐになると、彼女が両手を胸の前でクロスさせているのが見えた。

そんな微妙な距離と、その間を通り抜ける静けさに耐えられなくて、卑怯だとは思いつつも、僕は質問で返していた。

「理由は……………たくさんあるよ。でも、特に言うならね……………」

話そうとする彼女の顔が、一瞬ゆがんだように見えた。

とても見ていられなくて顔を背けた僕の視界は、少しずつ暗くなっていく

「ん……………んあ」

頭が重たくなる感覚とともに、僕、狩谷聡介かりやそうすけは目を開けた。

そして時間差で全身に痛みがやってくる。硬い椅子に座り、腕などは枕代わりにして寝ていたらしく痺れを起こしている。

顔を上げると、ちょうど時計が目に入った。

「十二時、五十分か……………」

なんとなく時間をつぶやいてみる。頭が全く回らないので、とり

あえず目に見えたものを言葉にしておく。

とはいえ、このまどろんだ感覚に抵抗できるほどの力はなく。

「おやすみ……」

「……あああああつ！」

僕がもう一度夢の世界へ旅立とうとすると、耳を貫かれるほどの声が耳に入った。しかもそれがだんだん近づいてきている気がする。そう思うことができたのも束の間のこと。その直後、後頭部付近の鈍い感覚と共に、首が沈んでいた。

「もう休み時間も終わるのに、何また寝ようとしてるのよ！」

……どうやら、声が近づいてきたのは気のせいではなかったらしい。

「み、みずほか……もうちょっと加減をだな」

「何言ってるのよ聡介。これくらい衝撃を与えておかないと起きないから、申し訳ない気持ちをぐつとこらえて、ここは心を鬼にしてそうしてあげたんじゃない」

その口元が、少し上がっているように見えた。

「……というか、言い回しからしてあまりにわざとらしい。」

「絶対ウソだ……」

「何か言った？」

「いえ、なんでもございません」

「ならよろしい」

何がよろしいだよと思いつつ、今でも重く痛みが響く頭をさすりながら、僕は起き上がった。

そこには、正面からでもてっぺんがはっきり見えるほど高めに結われたポニーテールを揺らすクラスメイト、皆川みずほ（みながわみずほ）がいた。

ポニーテールという活発なイメージがあるが、みずほも漏れなくそういった種別にあたっている。

むしろ活発すぎて疲れるくらいだ………というか、既に今の一撃で思い知っているわけで。

「ところで、聡介さあ」

だからみずほが手を僕の机の上に置き、体を乗り出してきた時には僕は反射的にイスを後ろに引いていた。

「な、なに」

「何で一步引くのよ」

追加の一撃を食らうのを恐れているからですが、とはさすがに言えなかった。もし言ったら本当にやりかねない。

「近づいてくるからだ」

「かわいー、女の子に迫られて照れてるんだー」

「浮いた話の一つもないのによく言うよ」

言うてからしまった、と思っても遅かった。既にみずほの腕が僕の頭の上に振り下ろされているのだけは確認できたが、とてもそこからでは対応できるわけもなく。

「今度の休み、ちよーつと買い物に付き合ってくれない？　というか、付き合ってくれるわよね？」

机に穴が開くんじゃないかというほど頭が沈んでいた僕は、声を出すこともできず、それでも「うん」と反射的に頷いていた。

すっかり忘れてた。みずほは女子の人気がすこぶる高いものの、男にはモテない。本人もそれを気にしているんだった。

きつとこの意識を遠くさせるような一撃を放つからいけないんだよと、実際に身をもって思っているわけだが。

「む……なんか余計なこと考えてるでしょ」

鋭いことを言われたが、反論する余裕どころか何も答えられず、今度ばかりは僕の意思など関係なく、眠りの底へ……

もちろん、再び「寝るなー！」と叩き起こされる理不尽極まりない展開になってしまっただけだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2691i/>

好きになって

2010年10月11日12時15分発行